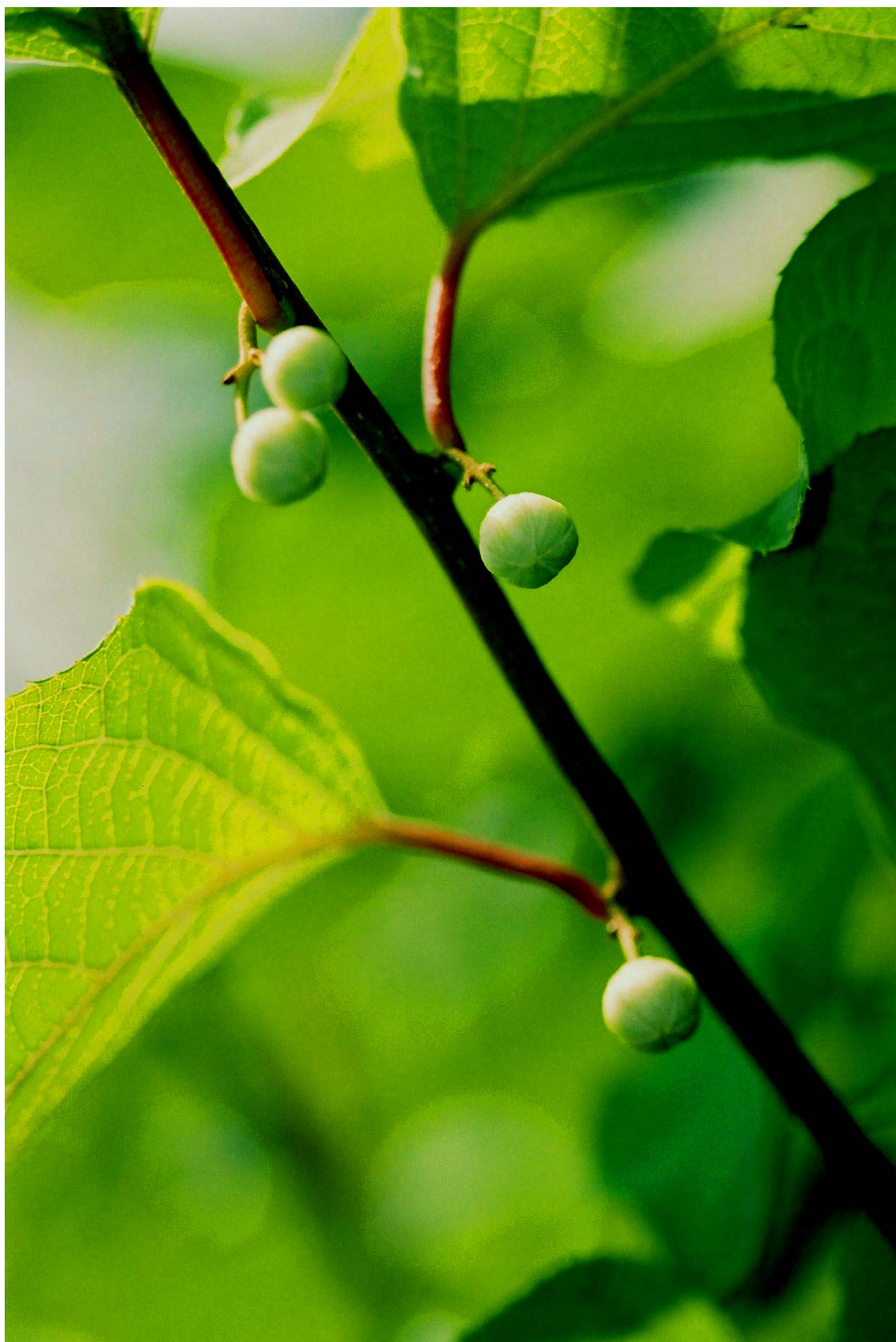


## 6) マタタビ=木天蓼

マタタビはマタタビ科の落葉ツル性木本で、日本各地の山地に普通に見られ、千島、樺太、朝鮮半島にも分布する。マタタビ属は東アジアの温帯から亜熱帯にかけて約40種があり、キーウイフルーツもこの属の植物で、食用になるものも少なくない。このマタタビも果実を塩漬けや果実酒にするが、若葉を食用にするとワサビに似た味がする。高さは約5mに達し、葉は互生する。葉の長さは5cmほどの卵円形で先端が鋭く尖り、縁には細かい鋸歯がある。若いツルの先端の葉は白色となり、遠くからでもよく目立つ。また開花期には葉の表面が白く変化する特性があり、6~7月頃、梅の花に似た径2cmほどの白い5弁花を下向きにつける。果実は先の尖った弾丸のような形をしており、長さは3cmほどで8~9月頃、熟すると黄色になり、中には多数の種子がある。和名はアイヌ語のマタタンブに由来するという説が有力で、マタタンブとは「冬木にぶら下がっている」という意味である。この他にも長い果実と短い果実がなるために、マタツミが転訛したとする説や、旅人がこの香りで回復し、再び旅を続けたことに由来するとする説などがある。別称としてはナツウメ、ワタタビ、マンタブ、マッタービ、ネコナブリ、チカプクッチョなどがある。チカプクッチョもアイヌ語で、その意味は「鳥のサルナシ」、サルナシとはコクワのことである。学名は『*Actinidia polygama*』、属名は「放射線」を、種小辞は「雑居性花の」という意味である。イギリスでの呼称は『silver vine』、中国名は『木天蓼』(モクテンリョウ)である。

マタタビの果実に『マタタビミタマバエ』が寄生すると虫瘤ができる。漢方ではこれを採取して、熱湯を注ぎ乾燥させたものが生薬の『木天蓼』(モクテンリョウ)で、体を温める効果があり、煎じたり、粉末にして神経症や冷え症に、また腰痛、腹痛に用いる。特に木天蓼酒は『天蓼酒』(テンリョウシュ)とも言い、中国で唐代に蘇敬等(ソケイトウ)により編纂された『唐本草』には、その用法が細かく記されている。なお『唐本草』は世界初の医薬物の百科全書で850種類の薬が記載され、絵も付け加えられている。この薬効を知ってか、縄文人も果実を食用にしていたと見えて、福井県の『鳥浜貝塚』や青森県の『亀ヶ岡遺跡』からは、種子が出土している。917年の『本草和名』には「和多々比」として、927年の『延喜式』には「和太太備」として、その記述が見えるところから、かなり古い時代から利用されていたものと思われる。

江戸時代になると貝原益軒も1702年刊行の『菜譜』の中で、食用になることを記す一方、花を花瓶に挿すとも述べている。さらに『花壇地錦抄』では栽培方法が記され、『公益地錦抄』には「花形梅花に似て白し」と記したうえで、同時に猫との関わりに関しても記述している。植物全体にモノテルペン系のアルカロイド、『アクチニジン』を含んでおり、猫に麻痺効果をもたらすマタタビラクトンは、『イリドミルメシン』や『ジヒドロネペタラクトン』などの混合物である。また『マタタビオール』というアルコール類には、クサカゲロウの雄を誘引する作用があることで知られている。



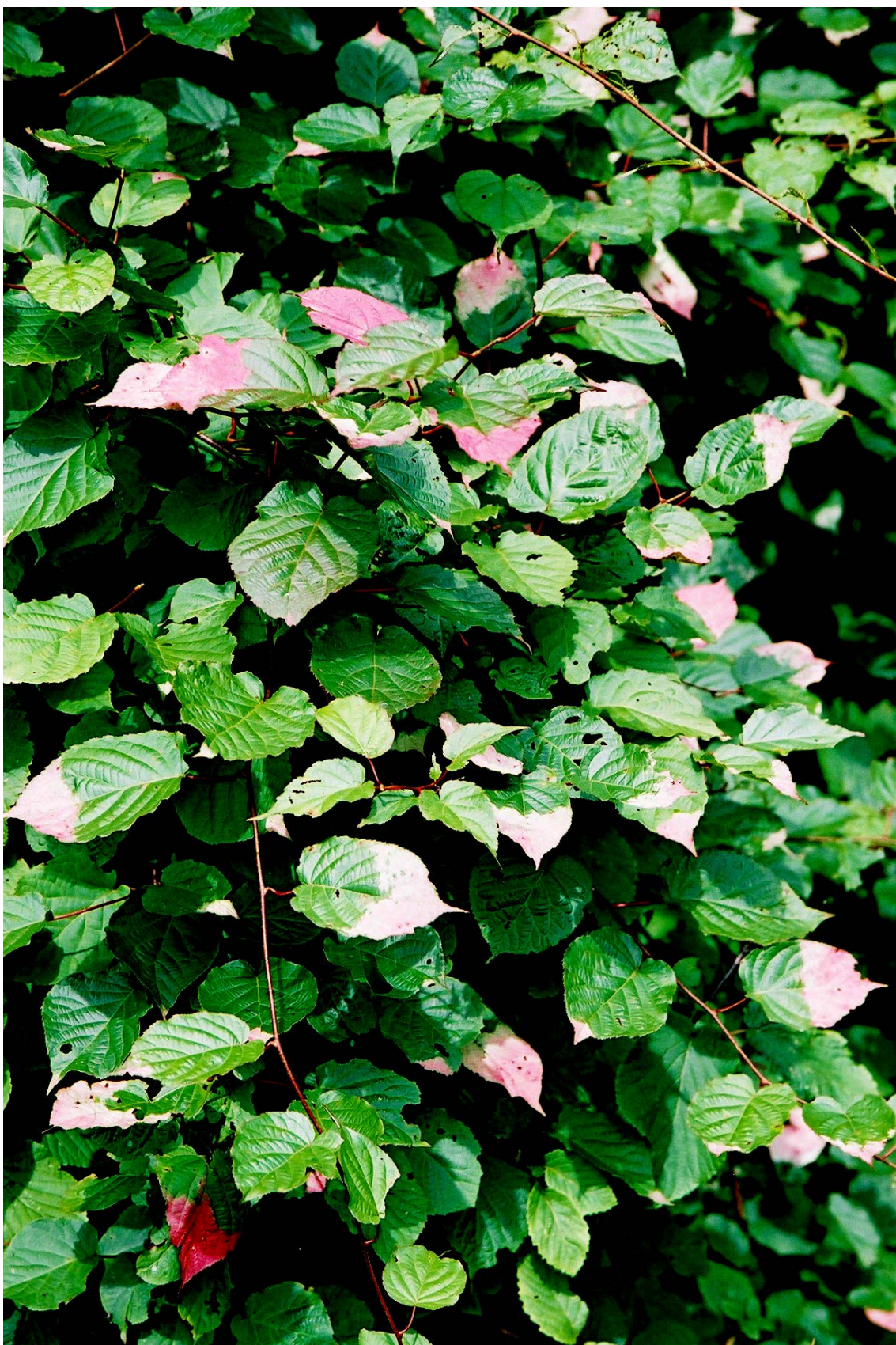
マタタビの蕾、すぐ咲きそうでなかなか咲かない(東京都小平市薬用植物園)。





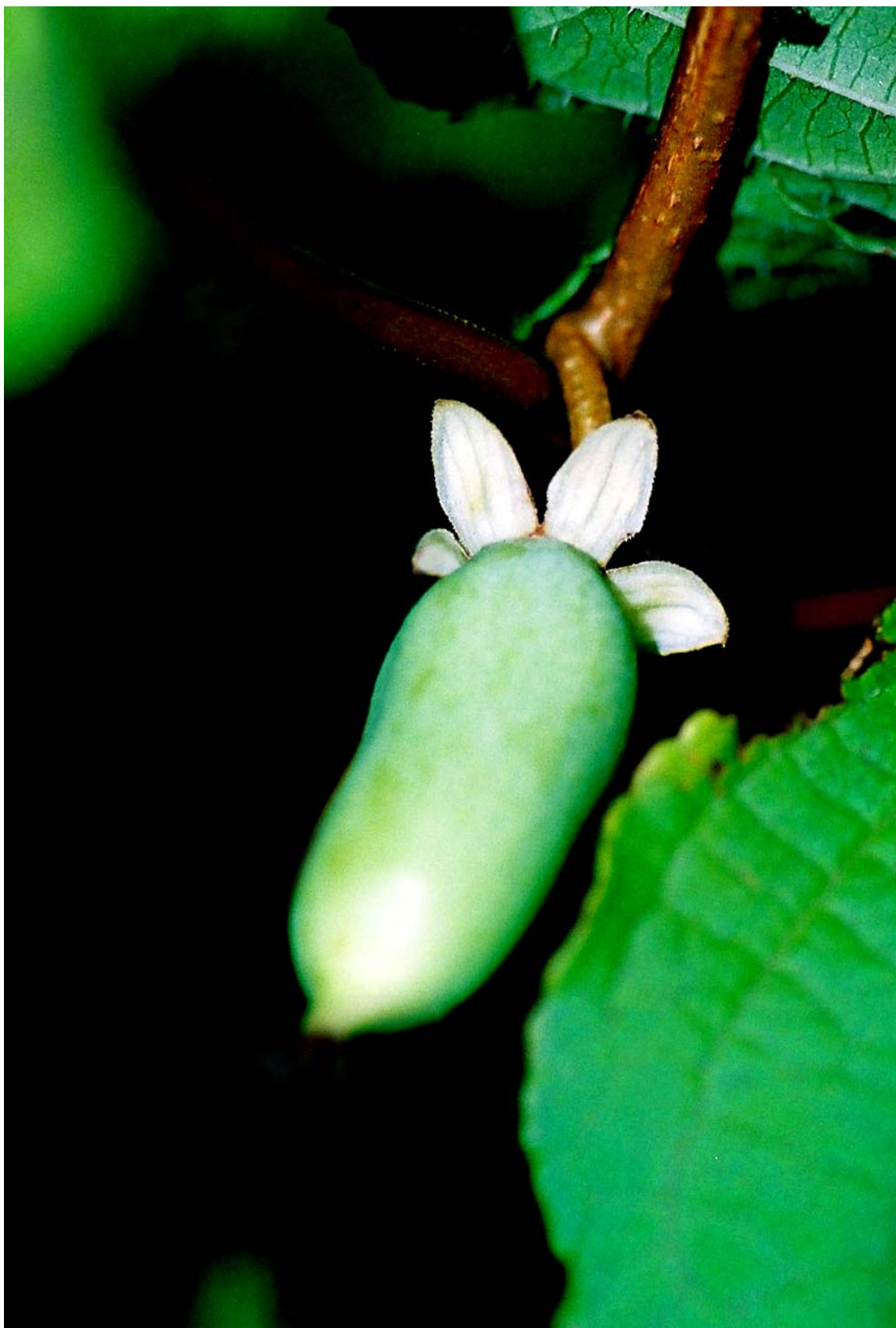
マタタビの花、想像してたよりも大きな花だった(東京都小平市薬用植物園)。





開花期の紅を帯びた葉。ハンゲショウやポインセチアも開花期に葉色が変化する(長野県長門町)。





熟してくると果実は次第に水雷形になる(東京都小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)